

東京大学大学院経済学研究科の蔵書から

野原 慎司

東京大学の経済学部図書館は、前身の経済統計研究室が1900年に設置された。それ以降、多数の書籍を収集し、知の拠点として機能してきた。知の拠点としての経済学図書館・経済学部資料室の蔵書の中から、そのコレクションを紹介した。加えて、貴重書の保管・収集を行う知の拠点としての経済学部資料室（寄贈資料の選定・収集、資料の修復、紙・製本に関する研究）についても紹介した。

まずエンゲル文庫について取り上げた。エンゲル文庫は高野岩三郎（1871-1949年：統計学者、社会運動家としても知られる）によって東京大学に所蔵されるに至っている。高野は、1899年にドイツ・ミュンヘン大学に留学する。渡欧前、指導教授の松崎蔵之助より、ヨーロッパで著名な統計学者の文庫が売り物に出たら、大学に通知してほしいと依頼を受ける。ミュンヘン到着後まもなく、エルンスト・エンゲル（1821-1896年：統計学者、エンゲル係数で有名）の所蔵本が売りに出されていることを知った。松崎にこれを通知し、大学から買いたいとの返事がきた。高野は書店と交渉し、なかなかまとまらなかったが、1900年4月ライプツィヒで買入れ交渉をまとめ、14,000冊におよぶエンゲル文庫を買入れる。これらの図書は東京帝国大学法科大学に送られ、これを契機に大学内に経済統計研究室が新設された（のちに高野はその主任になる）。エンゲル文庫は関東大震災で焼失したと信じられていたが、附属図書館の地下倉庫に千冊近くが集められていた。蔵書は、歴史、地理、紀行、経済、統計、天文学、気象学、鉱物学、栄養学、工学、鉱山学、化学工業、農業、

言語、文学と多岐にわたる。中でも、エンゲルは統計学に転じる前に、採鉱・冶金学を修めただけあり、その方面が多い。また医学、食品学も多い（エンゲル係数を思い起こさせる）。

アダム・スミス文庫は、1920年に、新渡戸稲造が買入れたものである。某大学が譲ってくれるよう要望したが、新渡戸は聞き入れず、日本に持ち帰った。

アダム・スミスは、生前に原稿を全て焼却処分してしまったがために、著作以外の活動について（学生による講義ノートと書簡を除いて）わからない点が多い。スミスの蔵書分析を通じて、これまでにわかっていなかったスミスの知的世界の全貌がわかる。アダム・スミスは通常は経済学者として知られている。スミスの研究者は、道徳・政治を含む「道徳哲学者」スミスに着目している。しかし、蔵書分析からわかったのは、経済学の書は相対的に少ないことである。「道徳哲学者」スミスに直接関連すると思われる、道徳・政治学の書もまた、蔵書の大半を占めるという訳ではない。全世界のスミス蔵書からうかがえるのは、経済学、政治学、道徳、法学のみならず、文学、詩、芸術、旅行記、博物誌など多岐にわたるスミスの知的関心である。そこからうかがえるのは、経済学者スミスの知的世界を形作っていたのは、狭い意味での経済学の書のみでも、もう少し広い道徳哲学の書のみでもなく、はるかに広範な知の世界だということである。その背景を分析すると、経済学者スミスの非経済学的起源がわかる。経済学の知の地平は、経済学以外のスミスの知的世界を反映していたのである。経済学はどのような知的世界に

基づくのか、それを知る手がかりを蔵書分析は与えてくれる。

そのみならず、より広くは、東京大学所蔵分も含むアダム・スミス旧蔵書には二つの人類史的意義がある。

スミス旧蔵書の研究から理解可能な第一の意義は、学問と宗教の近現代的決着である。人類史における宗教は世界宗教（キリスト教、イスラム教、仏教）の登場を画期として、それまでの祖先神・地域神・自然崇拜と違い、世界中の人を普遍的に救済することを目標とした。これには都市化という背景がある。近現代においては、学問は人間・社会・世界を解明し、「生き方」は宗教という役割分担（現代人には、identity crisis が生じやすい原因ともなる）となった。その近現代的決着は、啓蒙時代に現れたが、スミス文庫は、スミスが宗教にどう取り組んだかを伝えるものである。

スミス旧蔵書の第二の人類史的意義は、「境遇の改善」欲求（財産・地位の向上欲求）である。人類史を通じた大目標は、生き延びることであり、飢餓・病気・感染症・天変地異の克服であるが、資本主義社会における人間の目標は境遇の改善である。とりわけ 19 世紀以降、経済成長・人口成長・移民が急増し、境遇改善欲求はその原動力

になった。それは 18 世紀ヨーロッパで既に生じていた。底辺の労働者でも、最低限生き延びるだけの賃金は手にできるというのが、スミスの考えである。人類は境遇の改善を目指す、それは、生き延びるためという以上に、他人によく思われたい、他人に注目されたいという欲求に基づく。その欲求は、他人の同感を得ることを快樂に感じるという人間本性（同感 sympathy）に基づくのである。人間は利己心のみならず、他人の同感を得たり、あるいは逆に他人に同感したりすることを本能的に求めるというのがスミスの『道徳感情論』（1759 年）での考えだが、資本主義社会での境遇改善欲求もまた、同感があってこそ機能するのである。スミスがそのように考えた知的背景は、スミス旧蔵書からうかがえる。例えば、ヒュームはスミスの人間本性の考えに影響を与え、ラシーヌの戯曲は人間心理のスミスにおける考察に影響した。こうして、それらを含むスミス旧蔵書は、スミスがなぜそのように考えるに至ったかを明らかにしてくれるのである。

(のほら しんじ：東京大学大学院経済学研究科准教授)